

第 62 回 卒業式 学長式辞

2018. 3. 10 学長 西内みなみ

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。
今日の良き日は、皆様にとって特別な記念日となります。7 年前の 2011 年 3 月 11 日は、桜の聖母短期大学にとっても特別な日となりました。皆様お一人ひとりにとっても、特別な日として記憶に刻まれていることと思います。明日はその記念日として、私たち一人ひとは、置かれた場所で黙祷を捧げましょう。

2011 年 3 月 11 日金曜日 2 時 46 分、明日の卒業式を控え、卒業式のリハーサルが終わった学生たちは、ここマリアンホール講堂で卒業記念の写真撮影をしていました。数分が、数時間にも感じた揺れが少しおさまると、学生たちは、卒業式に着用するキャップとガウンを身に着けたまま、校舎から出て、短大敷地内のキャンパス広場という避難場所に集まっていました。余震が続き、さらに雪が降り始め吹雪いてくる中、隣接している学童保育所からも、子どもたちが泣き叫びながら避難してきました。学生たちは、身にまとったガウンを子どもたちにかけて、「大丈夫だよ。大丈夫だから」と、優しく抱きかかえていました。恐怖と寒さに震える子どもたちを、暖かく励ます姿は、愛する子どもたちを目の当たりにして、学生たちが愛と奉仕の精神で満たされていることを、私に気づかせてくれました。

この地震が、空前絶後の歴史的被災の始まりであることが、次第に分かりました。全ての交通手段は断たれ、携帯電話はつながりません。帰宅する手立てがない学生や、一人暮らしで怖くてアパートに戻れない約 120 名の学生は、ライフラインの電気と水があり、暖房が効いて暖かい、そしてお友達や教職員みんなのいる短大の一階学生ホールで、保護者からの連絡や迎えを待つことになりました。普段は、400 名近くが昼食をとることのできるスペースである学生ホールが、仮設の避難所になり、迎えに来てくれる保護者を待って、学生と教職員が共に一夜を過ごしました。この学び舎は、繰り返して襲ってくるどんな余震にもビクともせず、学生たちを守ってくれました。あんなに濃密な時間を学生と共に過ごせた時はなかったと思います。教職員全員が、一人ひとりの学生とその家族のことを思い、無事を喜び合い、これからの励まし合い、再会を誓い合って、一人ひとりを、心をこめて、桜の聖母短期大学から送り出しました。桜の聖母短期大学の 3. 11 は、大震災と

いう真っ暗闇に灯った、希望の光だと、その時に実感しました。

卒業生の皆様、覚えていますか。入学式でもお話させて頂きました。本学の本館正面玄関には、世界に一つしかない美しいステンドグラスがあります。そこには、二人の女性が描かれています。二人とも妊娠しています。向かって左側の女性は、聖エリサベト、お腹の中には洗礼者ヨハネ이었습니다。そして、右側が、まだ 10 代だと言われていた聖母マリア、お腹の中にはイエス様がいらっしゃいました。親戚で高齢のエリサベトが妊娠したことを知った聖母マリアは、自分も妊娠しているにも関わらず、山路を越えて、お見舞いに行ったという聖書に描かれた一場面です。そこに描かれた「ご訪問の聖母マリア」の精神、それは、心配な方がいたら、妊娠している我が身を省みず、ご訪問する、この愛と奉仕に生きる聖母マリアの精神、そして、それに倣って 360 年前、日本は、まだ江戸時代です。フランスから、大西洋を船で 2, 3 か月もかけて、未開地のカナダに、出かけて行って、多くの子どもたちや大人たちに教育を授け、愛と奉仕に生きた聖マルグリットブルジョワの精神です。聖マルグリットブルジョワの設立した修道会は「コングレガシオン・ド・ノートルダム」聖母マリアの修道会といえます。この修道会は、未開地だったカナダの発展に大きく貢献しました。聖マルグリットブルジョワは、カナダの方なら誰でも知っているシスターであり、聖人であり、カナダでは建国の母として敬愛されています。そして、何よりも、優れた教師でした。カナダの建国に大きな貢献をした聖マルグリットブルジョワの修道会が、1932 年、今から 85 年前、5 人のシスター達を日本に派遣して下さいました。それが、東京でも、仙台でもなく、この私たちの街、福島市に、です。これも奇跡です。福島市に修道院を開設され、まず、幼稚園を、そしてその子たちが進学する小学校を、中学校を、高等学校を次々と開設し、その高校生たちに高等教育を受けさせたいという願いから、63 年前、1955 年に開設された学校が、この桜の聖母短期大学です。カナダの修道会から、派遣されたシスター達も、福島の子どもたちや大人たちのために、愛と奉仕に生きて下さいました。この歴史と伝統によって、今日、私たちは、皆様の卒業をお祝いすることができるのです。

本日、卒業される 170 名の皆様を含めて 11, 735 名の卒業生がそうであるように、「愛と奉仕に生きる良き社会人」として、美しく成長され、今

日、皆様は、この学び舎を巣立っていかれます。先ほど、朗読された聖書のみ言葉、その時代背景やキリスト教の価値観については、2年間でしっかりと学んで頂きました。ただ、聖書に書かれている昔話ではなく、そのみ言葉は、今も生きて、この桜の聖母短期大学で働いている事を、皆様は、この2年間で実感して頂けたでしょうか。

（ヨハネによる福音：15 章1-3、11-17 節）

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。」

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

「互いに愛し合いなさい」このみ言葉が繰り返し述べられています。卒業生の皆様は、この2年間で「互いに愛し合う」ということを実感して頂けたでしょうか。私は、皆様と2年間で共にして、皆様が「互いに愛し合っている」ことを、日々、強く実感させて頂きました。毎朝出勤すると、

「ごきげんよう」とご挨拶して下さる皆様の笑顔に、皆様が眼を輝かして、身を乗り出していた様々な授業で、楽しそうにおしゃべりの花を咲かせているランチタイムのカフェテリアで、人が変わったように真剣な表情のスポーツ大会の体育館で、大成功だったあかしや祭でのエンディングの涙の中で、皆様同士が互いに愛し合っていることがよく分かりました。さらに、皆様は、キャンパスを出て、地域社会や様々なコミュニティで、多くの方々と愛し合っていました。国見町では幼児から高齢者まで関わり、さらに、沖縄では国際平和を祈り、修道会本部のあるカナダでは国際ボランティアをされました。皆様が様々な方々と互いに愛し合うことによって、建学の精神である

「愛と奉仕に生きる」ことを実践的に学んで下さったことが、よく分かりました。この2年間、私たち教職員に、皆様の成長を喜ぶ幸せを頂いたことに、心から感謝します。

昨日、行われた資格・免許授与式では、多くの皆様が、たくさんの資格と免許を取得されました。また、本日は、お一人ひとりに学位を授与させて頂き、極めて成績優秀・品行方正であった方を、皆様の代表として表彰させて頂きました。こうした見える学習成果を得るための皆様の努力には、はかりしれない価値と意義があります。生

涯、自分自身の誇りとして大切にしてください。この2年間で、それだけ努力されたという証です。そして、それは、ご指導頂いた教職員の誇りでもあります。桜の聖母短期大学は、学生一人ひとりが、喜び、賛美し、感謝することを学ぶ学校です。皆様が手にされた学位、資格や免許そして表彰を、ご自身の誇りにして頂くのと同時に「愛と奉仕に生きる良き社会人」として、これからも誰かのために役に立てて下さい。それが、今日まで、皆様と共に喜び、賛美し、感謝してきた私たち教職員一同の祈りです。

卒業生の皆様、今日という日は、これまでの人生の到達点であると同時に、これからの人生の出発点でもあります。これまでの人生への感謝と、これからの人生への期待を胸に、桜の聖母短期大学という学び舎を巣立って下さい。そして、これからの人生という大海原で、お幸せな時、嬉しい時、楽しい時は、桜の聖母短期大学の事を忘れて下さい。しかし、あなたの人生で、苦しい時、辛い時、悲しい時には、母校である桜の聖母短期大学のことを思い出して下さい。そして、何時でもいらして下さい。卒業生になられる皆様の、両手を広げてお迎えできる母校で在り続けることをお約束いたします。

保護者の皆様、高いところから、たいへん恐縮ですが、大切なお嬢様のご卒業、おめでとうございます。お嬢様のご卒業まで、多大なるご支援を桜の聖母短期大学に賜りました保護者の皆様に、深く感謝します。ありがとうございました。

また、ご多忙中、福島市長木幡浩様を始めとして、ご臨席を賜りましたご来賓の皆様、兼任教員の皆様にも御礼申し上げます。桜の聖母短期大学は、地域に深く根ざし、創立者聖マルグリットブルジョワの心をたずねながら、教育いちずという「小さな単純な歩み」を続け、人々から必要とされる「小さくとも教育で輝く」学び舎で在り続けます。そして、コミュニティの知の拠点として、「地域社会に開かれた大学」から「地域社会に貢献する大学」になるため、グローバルに考え地域で行動していく教育活動をさらに発展させて参ります。本日、巣立っていく卒業生共々、今後とも、ご支援・ご鞭撻をどうぞ、よろしくお願い申し上げます。

卒業生の皆様とそのご家族に、そしてこの桜の聖母短期大学に集うお一人ひとりに、主イエスキリストと聖母マリア、そして聖マルグリットブルジョワの豊かな祝福をお祈りして、式辞といたします。